

4-2 八千代市神野の江戸初期の一石五輪塔

藤 由美

はじめに

東西に延びる神野の集落中央に玉蔵院があり、その右手の子之神神社参道入口との間に、通りに面して「ドウヤマ」と呼ばれる古い石塔墓地（マイリバカ）がある（注1）。

この墓地は、神野村の草分け六軒の家で管理され、石塔はその先祖の供養塔と伝えられる。『神野の民俗』（注2）によれば、寛永8年（1631）銘を初見とし延宝4年（1676）までの五輪塔5基と寛文から元禄期までの板碑型墓碑が多いと述べられているが、その詳細は記されていない。2020年2月現在、目視で五輪塔は6基あり、うち2基は一石五輪塔であった。

石造の五輪塔は、一般に複数の別石を組み合わせて形作るが、地輪から空輪までを一石で彫成した小型の五輪塔は特に一石五輪塔と呼ばれる。

一石五輪塔は、室町時代（15世紀中ごろ）から江戸時代初期（17世紀中ごろ）に数多く見られ、主に墓標として用いられた。その分布は、関西地方を中心に広く確認されているが、関東以北ではその数は少なく、調査報告例もまれで、不明なことが多い。

調査結果として今回報告する一石五輪塔は、神野の2基と、参考にした白井市富ヶ谷の2基の計4基にすぎないが、今後の一石五輪塔データ集成の一助として報告したい。

1. 神野の一石五輪塔の立地状況と調査結果

(1) A塔（寛永16年銘）

- ・状況：ドウヤマ墓塔群中央にある。銘のある正面が裏側に向き、地輪下部のほとんどが斜面の土中に埋没して設置されていた。

- ・銘文：水輪〔種子 ア〕

地輪「寛永十六年（1639）／道胤禪定門／己卯三月九日 敬白」

- ・法量：空輪部を欠く。高さ 65（空輪を入れると 75cm 位か？）×幅 20×奥 16.5cm



2020. 2. 22 正面が裏に



2020. 8. 1 正面向きに据えなおした状況



(2) B塔（寛永 17 年銘）

- ・状況：2020 年 2 月、墓塔群の右端にあり、正面が左隣の念仏塔に接して左面を向いていた。その後、第二墓地に移動、同年 8 月に同墓地の個人の家墓地に設置された。
- ・銘文：地輪「〔種子 ア〕 寛永十七年（1640）／道金禅定之門 霊位／二月十六日」
- ・法量：高さ 71×20×20cm 地輪の高さ 28cm





2. 銘文の考察

A塔・B塔ともに、寛永期の没年銘のある江戸初期の墓塔で中世末には遡らないことがわかった。

A塔は、銘文「道胤」の「胤」字から、千葉氏系の帰農した武士の戒名とも推定される。また「禅」と「定門」の間に一字あるように見えるが、石の凹みを避けて、間が空いたと推定した。

B塔の「道金禅定之門」の之は当初「尼」と思ったが、「道金」は女性戒名ではなく、「禅定尼門」というのもありえないという早川正司先生のご助言で、改めて拓本を採ったところ、「尼」の「匕」の横棒かと思われたのは小さな傷で「尼」ではないことがわかった。左の弱い曲線を「卩」とし「院」とする案も考慮したが、早川先生のご教示で、字が「院」ではアンバランスな上、「院」が付くのは一般庶民の位号としては不相応であり、「禅定」の域に到達する男性を意図した「禅定之門」がふさわしいとの結論に達した。

なお、位号である「禅定門・禅定尼」とは「仏教の法門に帰入することによって正心行処を得た男女をいう」「尼は、比丘尼の略称であるのを在家の仏教婦人に用いたもので、本来は禅定門尼というのを禅定尼と字数を同一にして略したものである」(注3)という。

なお、B塔の置字「霊位」は、右から左に横に書かれ、「霊」の字は異体字である。

中世末の一石五輪塔は、空風火水地の各輪に「キャ・カ・ラ・ヴァ・ア」の各種字を彫るが、本例では、真言系の一般的な墓塔の様式の「ア」を1字を地輪の戒名の上に付けている。なお、A塔では、地輪ではなく水輪に入れているのは、中世の名残か、または地輪の字の配置上なのかはわからない。

3. 類似の一石五輪塔の報告例と調査結果

関東における一石五輪塔の調査報告事例が少ないので比較が難しいが、既報告の本間岳人「東京の一石五輪塔」(注4)では、形態と法量から、東京都世田谷区実相院の一石五輪塔(高さ51.8cm)に類似する。これは無銘塔ではあるが、長野市千代田墓地の寛永10年(1633)銘塔に類似することから、本間氏は17世紀前半の年代を想定している。



また近隣では、白井市復の富ヶ谷薬師堂に寛永11年(1634)と寛永19年(1642)銘の2基(注5)と、同市富塚天下太子堂には正保3年(1646)銘(注6)の一石五輪塔が報告されている。

富ヶ谷薬師堂の①の寛永11年銘塔は、高さ62cmで空輪を欠く。銘は「寛永拾一年甲戌／爲妙泉禪尼□也／二月十九日」、□は「菩提」の略字(𪛗「ササ点菩提」という合字)で、「妙泉禪尼の菩提の為なり」と読む。空輪の「キャ」を除き、五大の「カ・ラ・ヴァ・ア」の梵字を各輪に刻む。

同じく富ヶ谷の②の寛永19年銘塔は、高さは65cm、銘は「于時寛永十九年壬午／(梵字[ア])為道清禪定門也／頓證菩提／二月廿三日」。「頓證菩提」とは、速やかに悟りを開くことの意味である。



この2基については、今回実地調査し、注5の報告書掲載の銘文の文字と梵字を、下線部の通りに改め、また補充した。

印西市では小林の西福寺の承応元年（1652）銘と元禄7年（1694）銘の2基があり、承応元年銘塔は、高さ95cm、銘は「梵字（阿弥陀三尊）／承応元年／爲月寂浄因禅定門七回忌／十月三日」である（注7）。

また、古い墓地の土中から、銚子砂岩製の30cm以内の小型の一石五輪塔が見つかることがある。これらは、家形の廟墓の中に納入されたもので、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられている（注8）。

4. その他の別石五輪塔4基の調査データ

ドウヤマには2基の一石五輪塔のほか、別石で組まれた一般的な五輪塔が4基あった。銘文と法量を調査したので、年銘順に以下に記す。

- ① 銘文：「寛永七年（1630）／道空禅定門／十一月十日」

法量：総高92cm 地輪20×24×24cm

- ② 銘文：梵字〔ア〕「慶安二己丑年（1649）／□禅定尼靈位／八月廿日」

法量：総高115cm（空輪の先端が欠けている） 地輪：26×29×29cm

- ③ 銘文：梵字〔ア〕「承応元壬辰年（1652）／鑒玄□宗□／極月朔日」

法量：総高125cm 地輪28×28×27cm

- ④ 銘文：梵字〔ア〕「延宝四年（1676）／了惠善智禅定門不生位／辰／四月朔日」

法量：総高139cm 地輪45×32×27cm



① 寛永7年銘五輪塔の銘文部分



左：②慶安2年銘塔 右：③承応元年銘塔

以上の結果から、ドウヤマの五輪塔の紀年銘の初見は寛永7年と判明した。

形態は、空輪が大きいことや、線彫りで省略された反花座の蓮弁の表現など、麦丸セイマイ前墓地の万治3年(1660)銘と寛文2年(1662)銘五輪塔に類似していた(注9)。

なお、①と④の五輪塔は、一石五輪塔とともに第二墓地に移設され、2020年8月現在、ドウヤマにはない。

おわりに

ドウヤマの一石五輪塔、特に通りに面した右端のB塔は目につきやすく、通るたびに興味深く眺めていた。二つの塔とも銘文は見えず、文献で中世に多いといわれる一石五輪塔ではないかとも思っていたが、房総石造文化財研究会の早川正司会長から「江戸初期墓石の一石五輪塔の事例は少なくない。必ず地輪に銘文があるはずなので、年銘を確認するように」とご助言をいただき、裏側に向いていた本来の正面の銘文を調べて、寛永16年と17年の紀年銘を確認でき、江戸時代初期の一石五輪塔であることがわかった。

また、白井市富ヶ谷の2基の一石五輪塔も調査して、早川先生からのご教示で報告書の銘文を改めることができ、神野の2基と同時期の一石五輪塔の正しい情報を把握することができた。

筆者は2016年に八千代市麦丸、2019年に下高野の石塔墓地の全墓塔調査を、当会会員とともに行った。麦丸では万治3年(1660)銘と寛文2年(1662)銘の五輪塔、下高野では寛永18年(1641)年銘から承応4年(1655)銘の3基の宝篋印塔がその墓地内では古く、他の板碑型塔や仏像塔とは別格の形態と祀られ方から、近世の村落成立に係る先祖の墓塔であると推定した(注9・10)。

神野でも、一石五輪塔を含む寛永7年銘から承応元年銘までの5基の五輪塔は、まさしくムラの草分けの家の墓塔であろう。

文献では、近世神野村の成立は慶長7年(1602)の「水帳」(注11)に遡る。その30～50年後の寛永から承応期に没年を迎えた父母の霊は、手厚く供養されたに違いない。

ムラの墓地の石塔は、江戸期の人々がこの世を生き来世へと旅立った人生の証であり、文書史料の少ない江戸初期の村と家の成立を知る手がかりのひとつであると思う。

なお、銘文の解説や関東の一石五輪塔に関する先行研究に関しては、早川正司先生、野口達郎先生、藤澤典彦先生の先生方にご教示いただいた。

お世話になった早川先生、野口先生、藤澤先生、またドウヤマ墓地を管理されてきた神野の旧家の方々に深く感謝申し上げます。

注

1. 蔵由美「神野村の明治七年『墓所繪圖面書上帳』『史談八千代』45号(本誌)

2. 西海賢二「第四章 金石文」『神野の民俗』八千代市教育委員会 1976 年
3. 「真言宗の戒名」『戒名・法名・神号洗礼名大事典』鎌倉新書 2000 年
4. 本間岳人「東京の一石五輪塔」『論集 葬送・墓・石塔 狭川真一さん還暦記念論文集』
2019 年
5. 『白井町石造物調査報告書―第一集―』白井町教育委員会 1986 年
6. 『白井町石造物調査報告書―第四集―』白井町教育委員会 1989 年
7. 『小林地区調査報告書―印西町石造物 第二集―』印西町教育委員会 1981 年
8. 『近世の墓石と墓誌を探る』立正大学博物館 2015 年
9. 蕨由美「供養された江戸時代の麦丸の人々―大日前の詣り墓とその裏山の供養塔調査から―」『史談八千代』第 41 号 八千代市郷土歴史研究会 2016 年
10. 蕨由美「下高野福蔵院墓地の全墓塔調査について」『史談八千代』第 44 号 八千代市郷土歴史研究会 2019 年
11. 「慶長七年八月 神野村水帳」『八千代市の歴史 資料編 近世 I』八千代市 1989 年
☆3 と 4 の資料は、野口達郎氏からのご提供による。